保育者による保護者支援のあり方

― 保護者の必要とするサポートを踏まえた検討 ―

平成３０年１０月

島根大学教育学部

「教育臨床総合研究17　2018研究」

保育者による保護者支援のあり方
― 保護者の必要とするサポートを踏まえた検討 ―

A study of support given by nursery staff
― an analysis of parents' needs ―

久保田　智　子*　　石　野　陽　子**
Tomoko　KUBOTA　　Yoko ISHINO

要　旨

本研究では，保護者を取り巻くソーシャルサポートの中で保育者による保護者支援のあり方の検討を目的とし，両者に質問紙調査を行った。その結果，両者は保育者の日々の子どもとの丁寧なかかわりや，子どもの日々の姿の報告を重要視しており，保育者は日々顔を合わす存在であることを生かした支援が有効であると推察された。加えて，アドバイスや情報の提供等，保育者の専門性を生かした支援の充実が課題であることが示唆された。

〔キーワード〕　保護者支援　保育者　ソーシャルサポート　質問紙調査

Ⅰ　問題

近年，核家族の増加や女性の社会進出など社会状況の変化により子育てに対する支援の必要性が高まってきている。保育所保育指針，幼稚園教育要領，及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領それぞれにおいて，保育者の専門性を生かした保護者支援を行うことは，職務として明記されている。しかし，保育者にとって保護者支援は重要な職務であるにもかかわらず，保育現場からはその難しさが多数報告されている。小野田（2005）が幼稚園教諭に対して「あなたは保護者対応の難しさを常日頃感じておられますか？」とアンケートで質問した結果，42%が「大いに難しさを感じる」，50%が「少し難しさを感じる」と回答した。つまり，幼稚園教諭の92%が保護者支援を難しいと感じていることが明らかになった。また，2013年の厚生労働省「保育を支える保育士の確保に向けた総合的取組」によると，保育士資格を有しながら保育士としての就職を希望しない理由を尋ねた結果，「保護者との関係が難しい」と答えた人の割合が19.6%であった。つまり，５人に１人の潜在保育士が保育士としての就職を希望しない理由として，保護者との関係の難しさを一つの要因としていることが明らかになっている。

実際の保育現場での保護者支援における難しさの報告に関してもいくつかの研究がある。若

*学校法人斐川コア学園　出雲コアカレッジこども福祉科
**島根大学教育学部初等教育開発講座

手保育者の保護者支援に関する研究をした片山（2016）によると，若手保育者が感じている保護者支援の難しさのうち，「保育者と保護者の子どもの捉え方のずれ」，「こちらが伝えることをなかなか理解してくれない親への対応」など，保育者と保護者の関係から生じている難しさも挙げられている。また，「気になる保護者」について保育士及び幼稚園教諭にアンケート調査を行った久保山・齊藤・西牧・當島・藤井・滝川（2009）によると，保育者は保護者の気になる点について，「保育者の話が伝わらない」，「子どものことや必要なことを話さない」，「園に関心が薄い，協力的でない」等の，両者の関わりの中で生じることも挙げていることが明らかになった。これらのことから，保育者にとって日々保護者とかかわる中で，関係構築や保護者支援の難しさを感じており，苦慮していることが推察される。

西・金子・山口（2013）は，保護者と保育者の関係構築の難しさ及び，保護者支援の難しさは，保育者がしたいと思う支援と，保護者が受けたいと思う支援が違ったときに，互いの意識のずれを感じ，難しさが生じることを指摘している。また，木曽（2011）による保育者が発達障害のある子どもの保護者を支援するプロセスを検討した研究によると，保護者との思いの対立を経験した時に，それが保護者支援を難しいととらえることに繋がることを明らかにしている。このように，保育者による保護者支援における問題において，保護者と保育者のすれ違いが一要因となっていると推察される。そのため，保育者と保護者が保護者支援についてどのようにとらえているのか明らかにすることは，このような問題の解決の一助になるのではないだろうか。

保護者は日々育児をする中で，配偶者，親族，医師，保育者等様々な人的環境からサポートを受けている。このように個人を取り巻く周囲の様々な人物から社会的関係の中で与えられる有形無形のサポートをソーシャルサポートという。現代社会においては，育児不安が社会問題化してきたこともあり育児期の母親に関する研究が多くなされ，その中でも，ソーシャルサポートの考え方は多用されている（寺見，2015）。

保育者も保護者を取り巻く周囲の環境の一人としてソーシャルサポートのサポート源である。しかし，夫や実母などの家族を対象とした研究が多く，保育者に関しては一支援者として検討された研究はあるが，保育者が保護者に行うソーシャルサポートに焦点を当てて検討した研究はほとんどない。浦（2012）は，ソーシャルサポートはサポートの種類や内容によってそれぞれ適した他者から提供されたときに有益なものとなることを言及している。つまり，保護者を取り巻く環境の中で保育者だからこそ提供できるサポートもあると考えられる。

Ⅱ　目的

先述の通り，保育者による保護者支援は社会的にも必要性，重要性が増しており，保育者の職務として位置づけられているにもかかわらず，保育現場では保育者と保護者の間にすれ違いが生じ，保育者はその難しさを感じているという報告がある。保育者は保護者のサポート源の一つとしてどのような支援ができるか，ソーシャルサポートの考え方を基にし，保育者と保護者の考え方の相違を明らかにする。ソーシャルサポートの種類に関しては，主に①情緒的サポートと②道具的サポートの2つに大別されている。しかし，研究者によって諸説あることも明らかになっている。House（1982）は，サポートの種類を①情緒的サポート，②評価的サポート，③情報的サポート，④道具的サポートの４つに分類した。その分類を基に，上村・石隈

（2000）は「小学校の教師からのサポートに対する母親のとらえ方」を調査したところ，母親は教師からのサポートの種類を①指導的サポート，②道具的サポート，③情緒的サポートの３つでとらえていることが明らかになった。すなわち，サポートの受け手と与え手が異なる場合，サポートの種類も異なると推察される。そのため，保護者が保育者からのソーシャルサポートをどのような種類でとらえているのか因子分析により明らかにする。以上を踏まえ，保育者による保護者支援のあり方を検討することを目的とする。

Ⅲ　方法

１．対象者

中国地方の幼稚園・保育所を無作為抽出にて選出した。その中で，調査の協力が得られた保育所5園，幼稚園4園の保育者及び，保護者に質問紙調査を行った。保育所には，保護者331部，保育者57部配布した。その結果，回答は保護者：144部，保育者26部であった（回収率：保護者34.4％，保育者45.6％）。幼稚園には，保護者143部，保育者24部配布した。その結果，回答は保護者100部，保育者19部であった（回収率：保護者69.9％，保育者79.1％）。

２．調査時期

2016年７月から９月にかけて実施した。

３．質問項目

保育現場で保育者が保護者へ行うサポートとして実際に行われると考えられるもので構成した。質問紙の項目を作成するにあたって，現役幼稚園教諭２名及び保育士１名に「保護者に実際に行っているサポート」に関して面接調査を行い，19項目を作成した。また，乳幼児期の子どもを持つ親に対するソーシャルサポートの研究（藤田ら，2014；大谷ら，2012；橋本ら，2006；石ら，2013；日下部，2012；芝崎ら，2013）で使用された項目（21項目）を加え，合計33項目を質問項目とした。

サポートの次元に関しては①必要とするサポート，②実行されたサポート，③知覚されたサポート，④社会的包絡の４つに分類されている。①必要とするサポートとは，サポートの受け手が受けたい，必要だと感じているサポートのことである。②実行されたサポートとは実際に行われたサポートの頻度を問うものである。③知覚されたサポートとは被援助者がサポートを主観的に知覚された経験として把握するアプローチである。④社会的包絡とは，サポートの受け手が有しているサポートを得られるネットワークのことである。

本研究においては，保育者による保護者支援を対象としているため，④社会的包絡は調査対象に入らないと考えられる。そのため，質問項目である33項目についてサポートの次元に関しては，必要とするサポート，実行されたサポート，知覚されたサポートについて調査の対象とすることとした。

質問項目への評価は保育者，保護者それぞれ，必要とするサポート，実行されたサポート，知覚されたサポートによって構成した。４件法を用い，得点が高いほどより項目におけるサポートの必要性，頻度，評価が高いとした（表１－１）。以下，サポートの次元の表記に関しては｛　　｝を用いることとする。

表１－１　サポートへの評価

保護者	①受けたいと思う対応｛必要とするサポート｝ 「とても必要」(4点)―「全く必要ない」（1点）の4件法
	②実際に受けている頻度｛実行されたサポート｝ 「よくある」（4点）―「全くない」（1点）の4件法
	③ためになったかどうか｛知覚されたサポート｝ 「とてもためになった」（4点）―「全くためにならなかった」（1点）の4件法
保育者	①必要だと思うかどうか｛必要とするサポート｝ 「とても必要」（4点）―「全く必要ない」（1点）の4件法 ②実際に行っている頻度｛実行されたサポート｝ 「よく行う」（4点）―「全く行わない」（1点）の4件法
	③保護者のためになったと感じるかどうか｛知覚されたサポート｝ 「とてもためになった」（4点）―「全くためにならなかった」（1点）の4件法

４．倫理的配慮

調査対象者には，質問紙とは別に依頼文書を添え，調査の目的及び概要を示した。個人が特定されるような結果の公表や，本研究以外の用途への使用をしないことを記載し，調査用紙の返送をもって研究の趣旨に同意を得たものとした。

５．分析方法

統計解析ソフトIBM SPSS Statistics version 24.0（日本アイ・ビー・エム株式会社）を用いて統計的分析を行った。

Ⅳ　結果

１．因子数の決定と命名

保育者からのサポートに対する保護者のとらえ方を明らかにするため，保護者の｛必要とするサポート｝に関して，主因子法，バリマックス回転及び最尤法，プロマックス回転による因子分析を行った。その結果，解釈のしやすさから，主因子法，バリマックス回転を採用した。また，因子数３から７までの分析を行ったが，解釈のしやすさから５因子解を採用した。

|.35|以下の項目を削除し，残りの32項目について再度因子分析を行ったところ，累積寄与率は52.47％であった（表１－２）。以下，因子分析により抽出された，保育者からのサポートに対する保護者のとらえ方の表記に関しては＜　＞を用いることとする。

第１因子は，保育者からのアドバイスや他機関の情報の提供といった項目で構成されたため，＜相談的サポート＞と命名した。第２因子は，主に園における子どもの姿の報告で構成されたため，＜報告的サポート＞と命名した。第３因子は，保育者による保護者の頑張りへのポジティブな評価や保護者理解に関する項目で構成されたため，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞と命名した。第４因子は，保育者による子ども理解や褒めなどに関する項目で構成されたため，＜対子ども情緒的サポート＞と命名した。第５因子は，保護者自身がつらい時や悩みを抱えた時のサポートに関する項目で構成されたため，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞と命名した。

2．信頼性の検討

信頼性を検討するため，両尺度の下位尺度のα係数を求めた。表１－２に示す通り，α係数は．78から．91で統計的に安定した尺度であることが確認された。したがって本尺度は，「保育者からのサポートに対す保護者のとらえ方」を測定する尺度として安定していると判断できた。

表１－２　保護者の必要とするサポートの因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	h^2	Mean	SD
Ⅰ相談的サポート（α=.91）								
11 しつけに関するアドバイスを受ける	.68	.17	.19	.18	.19	.59	3.08	.73
10 生活時間に関するアドバイスを受ける	.62	.34	.20	.12	.21	.60	3.05	.70
18 子どもとの接し方に関するアドバイスを受ける	.61	.23	.24	.21	.13	.54	3.33	.68
17 子どもの身長・体重などの体の発育に関するアドバイスを受ける	.58	.34	.13	.12	.19	.52	3.14	.74
5 食事に関するアドバイスを受ける	.57	.28	.06	.22	.19	.49	3.20	.68
3 子どもの発達に関するアドバイスを受ける	.56	−.00	.08	.50	.08	.57	3.60	.55
8 子育てに関する相談を聞いてもらう	.54	.13	.21	.27	.29	.51	3.32	.66
7 相談機関に関する情報をもらう	.51	.25	.19	.16	.22	.43	3.05	.71
15 子育てに関するイベントの情報をもらう	.46	.32	.30	.03	.27	.47	2.91	.71
19 病院に関する情報をもらう	.45	.40	.33	.07	.19	.51	3.05	.71
22 子育てに関する勉強会の情報をもらう	.44	.25	.32	.05	.43	.55	2.74	.72
1 園での遊びに関する報告を受ける	.42	.41	.26	.25	−.02	.47	3.50	.50
Ⅱ報告的サポート（α=.82）								
24 園での排泄に関する報告を受ける	.23	.60	.12	.15	.29	.53	3.27	.68
31 排泄に関するアドバイスを受ける	.30	.57	.13	.14	.34	.56	3.14	.78
9 園でのけがに関する報告を受ける	.11	.53	.09	.22	.12	.36	3.68	.54
13 園でのトラブルに関する報告を受ける	.23	.53	.06	.19	.01	.37	3.76	.46
16 園での食事に関する報告を受ける	.46	.52	.13	.22	.01	.55	3.48	.61
27 園での友達関係に関する報告を受ける	.22	.51	.16	.34	−.40	.46	3.57	.55
Ⅲ対保護者ポジティブ情緒的サポート（α=.88）								
30 あなたの日頃の努力に関するねぎらいの言葉を受ける	.10	.12	.87	.11	.24	.88	2.37	.87
26 あなたの日々の子育てに対してのねぎらいの言葉を受ける	.24	.11	.81	.14	.28	.82	2.47	.83
29 保育者があなたのことを理解する	.17	.20	.63	.20	.33	.62	2.71	.79
33 保護者同士の仲立ちとなってもらう	.24	.30	.47	.11	.25	.44	2.70	.85
Ⅳ対子ども情緒的サポート（α=.78）								
2 保育者が子どものことを理解する	.10	.09	−.36	.72	.05	.53	3.84	.39
12 保育者が子どものことを褒める	.20	.29	.14	.58	.00	.44	3.71	.47
4 保育者が子どもの特性に合った対応をする	.25	.15	.07	.55	.13	.41	3.70	.52
6 園での子どもの集団活動に関する報告を受ける	.35	.29	.13	.49	−.11	.47	3.75	.45
14 子どものことについて話し合う	.38	.38	.24	.41	.04	.51	3.61	.58
28 保育者が子どもを心から受け入れる	.10	.16	.18	.41	.17	.26	3.71	.47
32 保育者と子どもの成長を喜び合う	.21	.29	.26	.38	.15	.37	3.59	.56
Ⅴ対保護者ネガティブ情緒的サポート（α=.86）								
23 あなたがつらい時に話を聞いてもらう	.19	.10	.39	.12	.68	.67	2.65	.78
25 あなたの悩み事を聞いてもらう	.19	.10	.43	.08	.66	.68	2.42	.82
21 家庭に関する相談をする	.36	.10	.27	.03	.62	.60	2.60	.82
Ⅰ							3.14	.27
Ⅱ							3.49	.24
Ⅲ							2.56	.16
Ⅳ							3.70	.09
Ⅴ							2.56	.12
固有値	4.78	3.38	3.32	2.83	2.48	Total	16.79	
寄与率(%)	14.95	10.55	10.37	8.85	7.75	Total	52.47	

3．各因子別平均値

「保育者からのサポートに対する保護者のとらえ方」の尺度をもとに，保護者と保育者の各サポートに対する各因子別平均値を算出した（図１－１，図１－２，図１－３）。

保護者の｛必要とするサポート｝における平均値は，＜相談的サポート＞3.14，＜報告的サポート＞3.49，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞2.56，＜対子ども情緒的サポート＞3.70，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞2.56であった。つまり，第４因子＜対子ども情緒的サポート＞，第２因子＜報告的サポート＞，第１因子＜相談的サポート＞，第３因子＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，第５因子＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞の順に保育者からのサポートを必要だととらえていることが明らかになった。

保護者の｛実行されたサポート｝における平均値は，＜相談的サポート＞2.66，＜報告的サポート＞3.09，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞2.70，＜対子ども情緒的サポート＞3.57，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞2.17であった。

保護者の｛知覚されたサポート｝における平均値は，＜相談的サポート＞3.15，＜報告的サポート＞3.46，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞3.15，＜対子ども情緒的サポート＞3.66，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞2.87であった。

保育者の｛必要とするサポート｝における平均値は，＜相談的サポート＞3.40，＜報告的サポート＞3.75，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞3.66，＜対子ども情緒的サポート＞3.94，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞3.68であった。つまり，第４因子＜対子ども情緒的サポート＞，第２因子＜報告的サポート＞，第１因子＜相談的サポート＞，第３因子＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，第５因子＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞の順に保護者への必要なサポートとして保育者はとらえていることが明らかになった。

保育者の｛実行されたサポート｝における平均値は，＜相談的サポート＞2.84，＜報告的サポート＞3.58，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞3.38，＜対子ども情緒的サポート＞3.84，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞3.19であった。

保育者の｛知覚されたサポート｝における平均値は，＜相談的サポート＞3.43，＜報告的サポート＞2.95，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞3.38，＜対子ども情緒的サポート＞3.58，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞3.34であった。

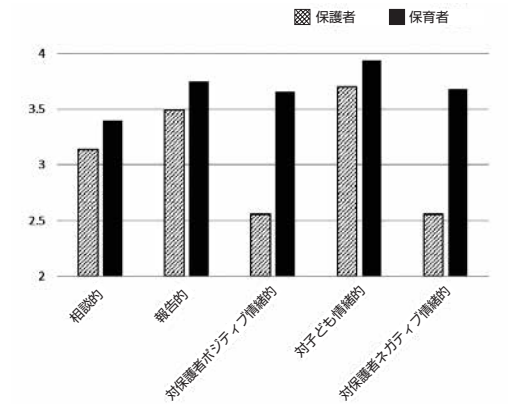

図１－１　必要とするサポート因子別平均値

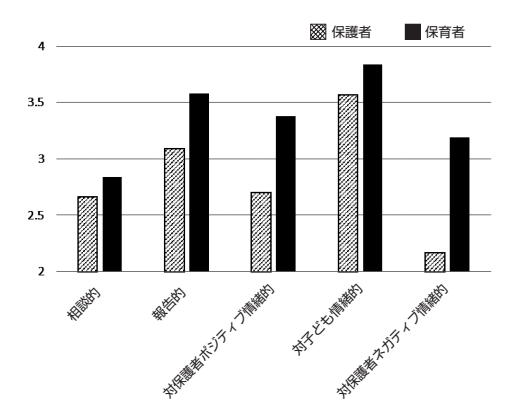

図１－２　実行されたサポート因子別平均値

4．因子の種類を要因とした平均値の差の検定

＜相談的サポート＞，＜報告的サポート＞，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，＜対子ども情緒的サポート＞，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞の各因子の種類によって平均値に差があるかを検討するために，因子の種類を独立変数，各因子の平均値を従属変数とする対応ありの一要因分散分析を行った。統計的に有意な主効果が認められた場合，ボンフェローニの方法による多重比較を行った。有意水準は0.1%とした。

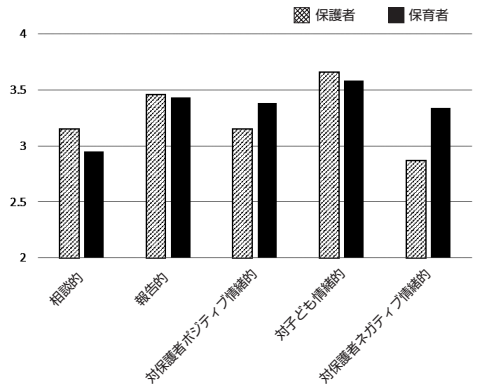

図１－３　知覚されたサポート因子別平均値

１）保護者の必要とするサポート

保護者の｛必要とするサポート｝の一要因分散分析の結果，因子の種類による効果は有意であった（$F(2.69,634.65)=422.71, p<.001$）。その後，ボンフェローニの方法による多重比較を行ったところ，＜対子ども情緒的サポート＞は他の因子よりも有意に高かった。＜報告的サポート＞は，＜相談的サポート＞，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞よりも有意に高かった。＜相談的サポート＞は，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞よりも有意に高かった。＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞と＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞との間に有意な差は認められなかった。

２）保護者の実行されたサポート

保護者の｛実行されたサポート｝の一要因分散分析の結果，因子の種類による効果は有意であった（$F(2.99,670.1)=327.43, p<.001$）。その後，ボンフェローニの方法による多重比較を行ったところ，＜対子ども情緒的サポート＞は他の因子よりも有意に高かった。＜報告的サポート＞は，＜相談的サポート＞，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞よりも有意に高かった。＜相談的サポート＞，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞の間に有意な差は認められなかった。＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞は他の因子より有意に低かった。

３）保護者の知覚されたサポート

保護者の｛実行されたサポート｝の一要因分散分析の結果，因子の種類による効果は有意であった（$F(2.35,495.15)=130.65, p<.001$）。その後，ボンフェローニの方法による多重比較を行ったところ，＜対子ども情緒的サポート＞は他の因子よりも有意に高かった。＜報告的サポート＞は，＜相談的サポート＞，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞よりも有意に高かった。＜相談的サポート＞，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞の間に有意な差は認められなかった。＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞は他の因子より有意に低かった。

4）保育者の必要とするサポート

保育者の｛必要とするサポート｝の一要因分散分析の結果，因子の種類による効果は有意であった（$F(4,136)=23.63, p<.001$）。その後，ボンフェローニの方法による多重比較を行ったところ，＜対子ども情緒的サポート＞は，＜相談的サポート＞，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞よりも有意に高く，＜報告的サポート＞，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞と有意差は認められなかった。＜報告的サポート＞，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞との間に有意な差は認められなかった。＜相談的サポート＞は他の因子より有意に低かった。

5）保育者の実行されたサポート

保育者の｛実行されたサポート｝の一要因分散分析の結果，因子の種類による効果は有意であった（$F(3.1,108.66)=45.99, p<.001$）。その後，ボンフェローニの方法による多重比較を行ったところ，＜対子ども情緒的サポート＞は他の因子より有意に高かった。＜相談的サポート＞は，＜報告的サポート＞，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，＜対子ども情緒的サポート＞よりも有意に低かったが，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞との間に有意差は認められなかった。＜報告的サポート＞，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞の間に有意な差は認められなかった。

6）保育者知覚されたサポート

保育者の｛知覚されたサポート｝の一要因分散分析の結果，因子の種類による効果は有意であった（$F(2.78,96.92)=24.14, p<.001$）。その後，ボンフェローニの方法による多重比較を行ったところ，＜相談的サポート＞は，他の因子より有意に低かった。＜報告的サポート＞，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，＜対子ども情緒的サポート＞，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞の間に有意な差は認められなかった。

5．保護者と保育者を要因としたｔ検定

保護者と保育者の各サポートの次元別，各因子の平均値において差があるかどうかを検証するために対応のないｔ検定を行った。

1）｛必要とするサポート｝におけるｔ検定

＜相談的サポート＞の平均値間に統計的に有意な差が認められなかった（$t(279)=-3.13, p>.001$）。＜報告的サポート＞の平均値間に統計的に有意な差が認められ（$t(63.29)=-4.59, p<.001$），保育者の平均値は保護者の平均値よりも有意に高かった。＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞の平均値間には統計的に有意な差が認められ（$t(82.52)=-14.27, p<.001$），保育者の平均値は保護者の平均値よりも有意に高かった。＜対子ども情緒的サポート＞の平均値間に統計的に有意な差が認められ（$t(135.68)=-8.22, p<.001$），保育者の平均値は保護者の平均値よりも有意に高かった。＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞の平均値間に統計的に有意な差が認められ（$t(79.38)=-14.11, p<.001$），保育者の平均値は保護者の平均値よりも有意に高かった。

2）{実行されたサポート} における t 検定

＜相談的サポート＞の平均値間に統計的に有意な差が認められなかった（$t(273)=-1.92, p<.001$）。＜報告的サポート＞の平均値間に統計的に有意な差が認められ（$t(79.23)=-7.36, p<.001$），保育者の平均値は保護者の平均値よりも有意に高かった。＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞の平均値間には統計的に有意な差が認められ（$t(69.59)=-7.10, p<.001$），保育者の平均値は保護者の平均値よりも有意に高かった。＜対子ども情緒的サポート＞の平均値間に統計的に有意な差が認められ（$t(104.52)=-6.04, p<.001$），保育者の平均値は保護者の平均値よりも有意に高かった。＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞の平均値間に統計的に有意な差が認められ（$t(64.31)=-9.59, p<.001$），保育者の平均値は保護者の平均値よりも有意に高かった。

3）{知覚されたサポート} における t 検定

＜相談的サポート＞の平均値間に統計的に有意な差が認められなかった（$t(64.21)=-2.53, p>.001$）。＜報告的サポート＞の平均値間に統計的に有意な差が認められなかった（$t(266)=.46, p>.001$）。＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞の平均値間には統計的に有意な差が認められなかった（$t(262)=-1.58, p>.001$）。＜対子ども情緒的サポート＞の平均値間に統計的に有意な差が認められなかった（$t(272)=1.09, p>.001$）。＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞の平均値間に統計的に有意な差が認められ（$t(73.06)=-4.17, p>.001$），保育者の平均値は保護者の平均値よりも有意に高かった。

6．サポートの次元を要因とした平均値の差の検討

{必要とするサポート}，{実行されたサポート}，{知覚されたサポート} の各次元において，平均点に差があるかどうかを検証するために，独立変数をサポートの次元，従属変数を各因子別平均値とする対応ありの一要因分散分析を行った。統計的に有意な主効果が認められた場合，ボンフェローニの方法による多重比較を行った。有意水準は0.1%とした。

1）保護者におけるサポートの次元を要因とした平均値の検討

保護者の分析の結果，第 1 因子＜相談的サポート＞においては有意な差が認められた（$F(1.86, 391.94)=96.03$, p <.001）。ボンフェローニ方法による多重比較の結果，{必要とするサポート}，{知覚されたサポート} と {実行されたサポート} の間に有意差が認められ，{実行されたサポート} が有意に低かった。{必要とするサポート} と {知覚されたサポート} の間には有意な差が認められなかった。

第 2 因子＜報告的サポート＞においては，有意な差が認められた（$F(1.93, 418.06)=59.24, p<.001$）。ボンフェローニ方法による多重比較の結果，{必要とするサポート}，{知覚されたサポート} と {実行されたサポート} の間に有意差が認められ，{実行されたサポート} が有意に低かった。{必要とするサポート} と {知覚されたサポート} の間には有意な差が認められなかった。

第 3 因子＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞においては有意な差が認められた（$F(1.79,376.53)=72.50, p<.001$）。ボンフェローニ方法による多重比較の結果，｛知覚されたサポート｝は，｛必要とするサポート｝｛実行されたサポート｝よりも有意に高いことが認められた。｛必要とするサポート｝と｛実行されたサポート｝の間に有意な差は認められなかった。

第 4 因子＜対子ども情緒的サポート＞においては，有意な差が認められなかった（$F(1.8,399.42)=8.19, p>.001$）。

第 5 因子＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞においては，有意な差が認められた（$F(1.88,402.75)=87.31, p<.001$）。ボンフェローニ方法による多重比較の結果，｛知覚されたサポート｝，｛必要とするサポート｝，｛実行されたサポート｝の順に有意に高いことが認められた。

2）保育者におけるサポートの次元を要因とした差の検討

保育者の分析の結果，第1因子＜相談的サポート＞においては有意な差が認められた（$F(2,64)=40.69, p<.001$）。ボンフェローニ方法による多重比較の結果，｛必要とするサポート｝と｛実行されたサポート｝，｛知覚されたサポート｝の間に有意差が認められ，｛必要とするサポート｝が有意に高かった。｛実行されたサポート｝と｛知覚されたサポート｝の間には有意な差が認められなかった。

第 2 因子＜報告的サポート＞では，有意な差が認められた（$F(1.49,47.82)=12.54, p<.001$）。｛必要とするサポート｝と｛知覚されたサポート｝の間に有意差が認められ，｛必要とするサポート｝が有意に高かった。｛実行されたサポート｝と｛必要とするサポート｝，｛知覚されたサポート｝の間には有意な差が認められなかった。

第 3 因子＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞においては，有意な差が認められた（$F(2,68)=12.68, p<.001$）。｛必要とするサポート｝と｛実行されたサポート｝の間に有意差が認められ，｛必要とするサポート｝が有意に高かった。｛必要とするサポート｝｛知覚されたサポート｝，及び，｛実行されたサポート｝と｛知覚されたサポート｝の間には有意な差が認められなかった。

第 4 因子＜対子ども情緒的サポート＞においては有意な差が認められた（$F(1.33,48.01)=25.41, p<.001$）。ボンフェローニ方法による多重比較の結果，｛必要とするサポート｝と｛実行されたサポート｝の間に有意差が認められ，｛必要とするサポート｝が有意に高かった。｛必要とするサポート｝｛知覚されたサポート｝，及び，｛実行されたサポート｝と｛知覚されたサポート｝の間には有意な差が認められなかった。

第 5 因子＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞においては，有意な差が認められた（$F(2,70)=15.42, p<.001$）。｛必要とするサポート｝と｛実行されたサポート｝の間に有意差が認められ，｛必要とするサポート｝が有意に高かった。｛必要とするサポート｝｛知覚されたサポート｝，及び，｛実行されたサポート｝と｛知覚されたサポート｝の間には有意な差が認められなかった。

Ⅴ　考察

1．サポートの種類について

因子分析の結果，保護者は保育者からのサポートを，＜相談的サポート＞，＜報告的サポート＞，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，＜対子ども情緒的サポート＞，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞の5因子構造でとらえていることが明らかになった。これは，House（1983）の4因子構造モデルや，上村・石隈（2000）が小学生の母親を対象とした「教師からのサポートに対する母親のとらえ方」の3因子構造とは異なる結果となった。田村・石隈（2000）による，サポートを受け取る側は，必ずしも提供する側が意図したとおりにサポートをとらえているとは限らないという見解と一致する。保護者が保育者のサポートを5因子としてとらえていることを，サポートの提供側である保育者が理解することが大切であると考えられる。このとらえ方を意識し，保護者への日々の言葉がけや，連絡帳などの支援やその振り返りに生かしていくことができるのではないだろうか。

2．＜相談的サポート＞について

＜相談的サポート＞は，保育者によるアドバイスや他機関の情報の提供などで構成された。保育者の｛実行されたサポート｝における＜相談的サポート＞と＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞の間には有意差が認められなかったが，それ以外の保育者の｛必要とするサポート｝，｛実行されたサポート｝，｛知覚されたサポート｝において，他のサポートの種類よりも有意に低いことが認められた。つまり，保育者は＜相談的サポート＞を他のサポートに比べ必要だととらえておらず，実行する頻度も他のサポートの種類より少ないことが推察される。一方で，保護者においては，＜相談的サポート＞の｛実行されたサポート｝の平均値は｛必要とするサポート｝，｛知覚されたサポート｝よりも有意に低く，｛必要とするサポート｝と｛知覚されたサポート｝との間には有意差が認められなかった。すなわち，＜相談的サポート＞を必要としている程受けることができていないのではないだろうか。｛必要とするサポート｝と｛知覚されたサポート｝との間には有意差がないことからも，サポートを受けた際には，保護者はためになったととらえていることが窺える。このことからも，保育者の専門性として保護者に＜相談的サポート＞を行うことに対して，もっと積極的になる必要があるのではないだろうか。

保育所保育指針や幼稚園教育要領，幼保連携型認定こども園教育・保育要領には保育現場における保護者支援において，保護者の思いや考えを聞きながら，子どもについて共に考え，方針を決めていく過程の大切さが明記されている。すなわち，一方的にアドバイスをしたり，支援をしたりするという関係ではなく，共に子どもについて考えていく過程の中で＜相談的サポート＞を行っていくことが望ましいと考えられる。

3．＜報告的サポート＞について

＜報告的サポート＞は子どもの園生活の様子等の情報の提供といった項目で構成され，＜対子ども情緒的サポート＞に次いで保護者の｛必要とするサポート｝，｛実行されたサポート｝，｛知覚されたサポート｝の平均値が他因子より有意に高かった。また，保育者の｛必要とするサポート｝の因子別平均値においても＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞との有意差は認

められなかったものの，＜対子ども情緒的サポート＞に次いで高く，必要なサポートとしてとらえられていることが明らかになった。

その理由として，＜報告的サポート＞は保護者と保育者がかかわる中でお迎え時や連絡ノートなどを通して毎日行われるサポートだということが考えられる。園に子どもを預ける保護者にとって，子どもが園でどのように過ごしたのか報告を受けることは重要なことである。保護者は園での生活について報告を受けることによって，安心感や信頼感をもつことができたり，家庭での子育てに生かしたりすることができると考えられる。このような日々のやりとりの積み重ねが互いの理解を深め，保育者と保護者の信頼関係の基礎となり，連携して子どもを育てる環境をつくり出すことに繋がるだろう。

４．＜対子ども情緒的サポート＞について

保護者，保育者の両者においてサポートの次元別，各因子別平均値の＜対子ども情緒的サポート＞の平均値は他因子に比べ高かった（図１-１，１-２，１-３）。また，保護者と保育者の｛必要とするサポート｝の次元においては共に＜対子ども情緒的サポート＞が有意に高かった。つまり，保護者は保育者による子どもへの姿勢や対応を求めており，保育者も子どもへの姿勢や対応が保護者支援において必要だと感じていることが明らかになった。

また，保護者の＜対子ども情緒的サポート＞において｛必要とするサポート｝，｛実行されたサポート｝，｛知覚されたサポート｝の間に有意差は認められなかった。つまり，保護者は＜対子ども情緒的サポート＞においては，保育者から必要としているサポートを十分に受け，満足も感じていると言えるだろう。

保護者支援の目的として，健やかな子どもの育ちのために支援することが一番の目的とされている。保護者，保育者共に＜対子ども情緒的サポート＞が他のサポートの種類よりも必要とされており，かつ，｛必要とするサポート｝，｛実行されたサポート｝，｛知覚されたサポート｝において高い平均値を示している。このことは，保護者と保育者が子どもの健やかな育ちのために保育者のサポートがあることを理解し，その役目を果たしていると言えるのではないだろうか。また，｛必要とするサポート｝の＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，＜対子ども情緒的サポート＞，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞においては，＜対子ども情緒的サポート＞が有意に高かった。保護者は自分自身への直接的な言葉がけよりも，保育者が子どもを理解している，真摯にかかわっているなど，子どもへの対応やとらえ方を保育者に求めていると言えるだろう。また，その保育者の子どもに対する真摯な姿勢がお迎え時の送迎の話や連絡帳，参観日等の行事での姿から感じることによって保護者のサポートに間接的につながっていると考えられる。

５．＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞及び＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞について

保護者の｛必要とするサポート｝において，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞及び，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞は他の種類のサポートよりも平均値が有意に低かった。すなわち，保護者は＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞及び＜対保護者ネガティブ情緒的

サポート＞を他の因子に比べ必要だととらえていないことが窺える。また，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞及び＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞の平均値がともに2.56であり，質問項目への評価が「3点：どちらかといえば必要である」「２点：あまり必要ない」であることからも保護者にとって必ずしも必要なサポートであるとはとらえられていないと考えられる。

一方，保育者の｛必要とするサポート｝においては，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞及び，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞は，＜報告的サポート＞，＜対子ども情緒的サポート＞よりも有意に低かった。しかし，＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞の平均値が3.66，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞の平均値は3.68であった。質問項目への評価得点が「４点：とても必要である」「３点：どちらかといえば必要である」であることを考慮すると，保育者は＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞及び，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞に関しても保護者に行うことが必要であり，職務だととらえていることが推察される。つまり，この２つのサポートに関して，保護者はあまり必要としていないが，保育者は必要な支援だとしてとらえており，とらえ方のずれがあると言えるのではないだろうか。

このずれが生じた保育者側の要因としては，保育者を取り巻く現状から２点考えられる。１つ目は保育所保育指針や幼稚園教育要領，認定こども園教育・保育要領において，保護者支援が保育者の職務であると明記されていることである。２つ目は，2011年より保育士養成科目として，『保育相談支援』が実施されたことである。この科目は核家族化や地域の子育て力の低下，親自身の養育力の低下などの問題を抱えた現代社会に対応するために設けられたものである。すなわち，保育士養成校において，保育者は保育をするだけでなく，ソーシャルワークやカウンセリングの知識や技術を用いて保護者を支援することも職務として学んでいる。これらのことから，保育者は＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞も自身の職務だととらえているのではないだろうか。

それに対して，保護者側の要因として，サポート源の認識の問題が挙げられる。小原・入江・南・武藤（2008）は，ソーシャルサポートの種類別に母親がサポート源として求める割合を検討した。すると，情緒的サポートを求める割合は夫44.6%，実母は52.8%であった。一方で，保育所に求める割合は9.1%であった。すなわち，保護者は情緒的サポートのサポート源を保育者よりも夫や実母に求めていると言えるだろう。また，浦（2012）は，ソーシャルサポートは適した場所から受けることで，効果を発揮することに言及している。これらの研究結果と本調査の結果と併せて見ても，保護者自身の情緒的サポートは夫や実の親などの身近な人物からのサポートが有効であり，保育者には求める割合が低いのではないだろうか。

以上のことを考えると，保育者は保護者に対して，保護者が配偶者や家族など周囲からの情緒的サポートを受けられるような環境づくりをしていく支援が有効だと考えられる。保育者はお迎え時や連絡ノートを利用して，家族が子どものことについて共有する機会が作れるよう配慮したり，一人で抱え込まず周りに頼ってよいことを伝える役割をしたりすることがそのための支援となると考える。また，家庭への介入が必要な場合には専門機関との連携を行うことも支援の一つだろう。

一方で，保護者における＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞は，｛知覚されたサポート｝｛実行されたサポート｝｛必要とするサポート｝の順に有意に高いという結果であった。つまり，

保護者の日頃の努力をねぎらったり，保護者自身を理解したりする必要性は低いと保護者は感じているものの，実際にそのようなサポートを受けた時には，ためになったと感じていることが推察される。必ずしも保護者に必要とされていない＜対保護者ポジティブ情緒的サポート＞でも，実際行われることにより，保護者のサポートへと繋がっているのではないだろうか。

また，保護者における＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞は，｛知覚されたサポート｝，｛必要とするサポート｝，｛実行されたサポート｝の順に有意に高いという結果が明らかになった。｛実行されたサポート｝が有意に低いのは，＜対保護者ネガティブ情緒的サポート＞が悩みやつらい時に関するサポートのため，日常的に行われるサポートではないことが一要因であることが推察される。また，｛必要とするサポート｝としては，上述のように，保育者よりも夫や実母などに求めることが一要因となって，他の因子よりも低い結果となったと考えられる。しかし，｛実行されたサポート｝と｛必要とするサポート｝と比較して｛知覚されたサポート｝が高いという結果となった。これは，実際に受ける頻度は低いものの，つらい時や悩みを抱えた時に保育者からサポートを受けた際，保護者はためになったと感じているのではないかと推察される。

したがって，保護者は自身への情緒的なサポートをあまり必要だとはとらえていないが，保育者は，保護者と関わる中で必要性を感じた時にサポートを行っていくことが重要だと考えられる。毎日顔を合わせる存在である保育者だからこそ日々の変化に気付き行うことができる支援なのではないだろうか。

Ⅵ　まとめ

本研究では，保護者と保育者に質問紙調査を行った。その結果，保護者は保育者によるサポートを５因子でとらえていること，その中でも，子どもに対するサポートを最も必要としており，そのサポートが保護者自身の支援にも繋がっていることが推察された。また，子どもに対するサポートに次いで，日々の子どもの姿の報告というサポートに関しても必要とされていることが明らかになった。保育者にとって，子どもと真摯にかかわり，子どもの姿を保護者に報告するという毎日の積み重ねが保護者支援において重要だといえよう。

保護者への直接的で情緒的なサポートに関しては，保育者からのサポートを保護者は必ずしも必要としてはいないものの，実際にサポートが行われた場合にはためになったと感じる傾向があることが明らかになった。保護者の情緒的サポートのサポート源を見極めながら必要に応じて，サポート源からのサポートが受けられるようにしたり，保育者自身がサポートを行ったりしていくことが必要となるだろう。

以上，本研究では保護者と保育者の両者の保護者に対する保育者のサポートに関するとらえ方を調査したが，本調査は選択式の質問紙調査であったため，保護者が保育者に必要としているサポートをすべてとらえることができたとは言い難い。また，保護者の属性に関わらず対象園の保育所・幼稚園に在籍する全園児の保護者を対象としたため，様々な境遇の保護者が含まれていたと考えられる。保護者自身が置かれている状況により，必要とする支援は異なるため属性を絞った検討が今後の課題である。

引用文献

House,J.S.（1981）．Work stress and social support. Reading, mass.: Addison-Wesley.

上村 恵津子・石隈 利紀（2000）．教師からのサポートの種類とそれに対する母親のとらえ方の関係―特別な教育ニーズを持つ子どもの母親に焦点をあてて―，教育心理学研究，48，284－293.

片山 美香（2016）．若手保育者が有する保護差者支援の特徴に関する探索的研究―保育者養成校における教授内容の検討に生かすために―，岡山大学教師教育開発センター紀要，6，11－20.

木曽 陽子（2011）.「気になる子ども」の保護者との関係における保育士の困り感の変容プロセス，保育学研究，49，200－211.

久保山 茂樹・齋藤 由美子・西牧 謙吾・當島 茂登・藤井 茂樹・滝川 国芳（2009）.「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査―幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき検討の提言―，36，55－76.

西 朋子・金子 真由子・山口 美和（2013）．保護者支援における保育者と保護者の関係性―ケアの与え手と受け手という視点を通して―，上田女子短期大学紀要，36，33－42.

小野田 正利（2005）．学校への“無理難題要求”の急増と疲弊する学校現場「保護者対応」に関するアンケート調査をもとに，147，16－21.

寺見 陽子（2015）．母親の育児ストレスの背景とソーシャルサポートに関する研究：母親の成育経験と子育て環境との関連，神戸松蔭女学院大学研究紀要人間科学部篇，4，59－73.

浦 光博（1992）．支え合う人と人―ソーシャルサポートの社会心理学―，株式会社サイエンス社.

島根大学教育学部附属教育支援センター研究紀要
『島根大学教育臨床総合研究 2018 Vol.17』掲載